

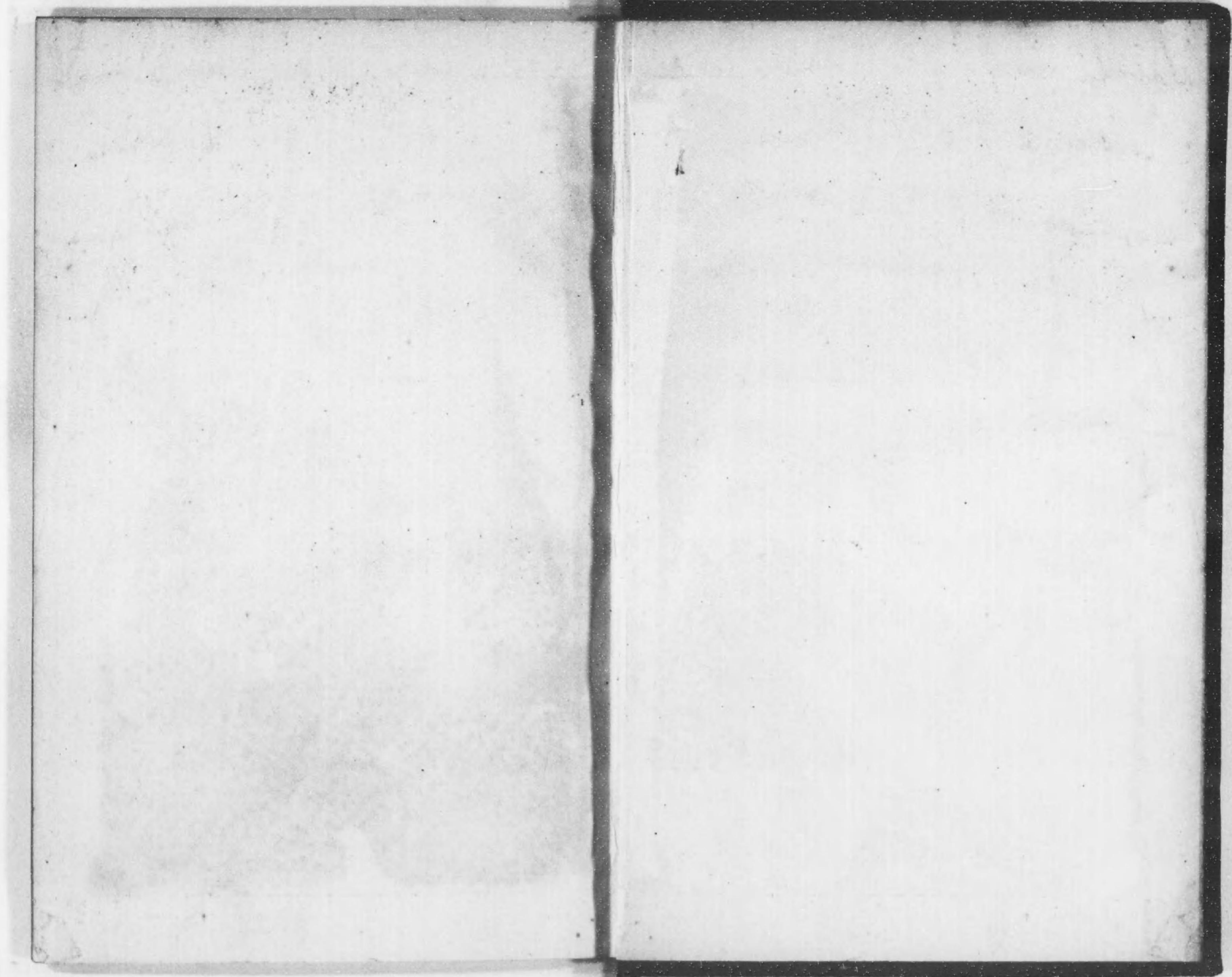
517
389

北
方
人

0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10^m 11 12 13 14 15

始





伊藤喬信著

詩集
北方

方
人

東京紅玉堂出版

大正
15. 9. 16
内交

總序

一、本書は、最近三年間に於て成就せるわが三卷の近作詩集「帆立貝」・「原始時代」・「北方人」の含著する約三百の詩の中から、八十篇を嚴撰して編纂したものである。

一、大正八年、亡き父への献詩集「奇妙な馭者」を計畫して挫折した。詩雑誌「詩の本」にその若干篇を發表した。それは私の第一詩集に當るものである。

一、貧窮と病痾は私を都會から追放した。既にして、流離の中に纏めてゐた姉妹詩集『陶酔の草叢』・『秘夜』と共に、私は北國で窒息した。それは私の第二詩集第三詩集に次第される。

二、運命の三つの嘆息を抛つて、ろまんすの王子の如く、私は、第四詩集『青天散歩』を試みた。それは、われらの詩雑誌『極光』が破産し、某書肆に迂濶に托したわが『秘夜』の詩稿を焼盡した、大正十二年（一九二三）である。

一、『帆立貝』は第五詩集に、『原始時代』は第六詩集に、『北方人』は第七詩集に相當する。そしてそれは、私の過去であり現在であり未來である、一つの兩重三世の相を開示するものである。

一、今、否定の錠も貢定の鍵も持つてゐない、私は、事事無礙界の門標を仰ぐ莊嚴穢土の洞窟で、わが第一結集の詩書の上に、假りに『北方人』と銘してその非業な行途を潔くするものである。

3
一、帆は風を孕んだ。大願の船よ、わが魂の周圍に近く浮沈する日月・人

情の港を遡つて遙かに行け！

一、偕て、本書が上梓の機を得たのは、偏に、わが中西悟堂の親愛にかゝるものである。最後に、刻して亡びぬ謝意を表する。

一九二六年三月

伊藤喬信

詩集「北方人」目次

總序

「帆立貝」

或る窪地にて歌へる……………	四
花々の死……………	六
慙ふ追放者は云ふ……………	九
或る薄暮の相……………	二二
一木の歌……………	一五
兀として暮るる……………	一八
鬼の如く徨ふ……………	二〇

一つの喜び……………三三

頻死の海……………二五

狂へる夜の追想……………二七

病院……………三〇

露 雫……………三一

古井戸に封せる秘義をあかす……………三三

破 芭 蕉……………三六

〔原始時代〕

(人間秘行)

釘を打つ……………四二

頌 歌……………四四

青蛙面壁……………四六

毒 箭……………四八

旗を掲げる……………五〇

大 望……………五二

不 死 鳥……………五四

樹上の魚……………五七

冰 河 期……………六〇

(鬼界散華)

月 光 曲……………六三

木 賊 林……………六六

美女微笑……………六九

暴風の夜の寂寞……………七二

えば・ぐりいん……………七四

不老華……………七六

夢中占卜……………七八

暗夜秘行……………八〇

運命の遊歩場^{へんたろ、ぶらむなあと}……………八二

(光明發端)

地球の極から……………八五

寂寞の幻……………八八

夜に聴く……………九一

緑の下蔭……………九三

影と形……………九五

古風な夜……………九七

魔神……………九九

人間素像……………一〇一

大都市……………一〇四

(大地莊嚴)

大地に湧く……………一〇七

蟲になりたい……………一〇九

悲しき畫像……………一一一

秋海棠……………一一三

べごにや……………一一五

烏……………一二六

あつはしゆらん……………一二八

山嶺行……………一三〇

(禱房秘扇)

斷魂賦……………一六六

かなしき情交……………一七〇

白旗……………一七三

蒼天歌……………一七五

梟の歌……………一七七

一切は夢である……………一八〇

竹杖……………一八二

死のべごにや……………一八五

宵の散歩……………一八八

寒夜……………一九九

雨……………一九〇

腐れ月……………一九二

寂滅偈……………一九三

失へる艇……………一九六

遍路の秋……………二〇〇

贖身の夜……………二〇三

以上



詩集「帆立貝」は「微かに遠し」・「鋭く切なる」の二部章から成つてゐるが後章の全篇は之を割愛して纔かに前章の十四篇を採つた。

「帆立貝」序

北海に芽ぐむだかなしい一つの花がある。

——この間、實に無限劫。

いつの代からであるか、名づけられてそれは「帆立貝」。呼ぶともなくまた喚ばれるともなく、風に乗じて徐ろに自適する。敢て厭世に非ず。とは云ふものの、恰も凡ての類をかけ離れて、かれは生活する。

暗鬱な海と陰惨な波の音、怪しい物の影と頌死の言葉、そして混沌虚無にも似た尅大な場面と。一體それらは何事をば代辯するか。惨さの中に現存する生き者の感情に、喜悦の點火は何處から齎らされるのだらう、魔術的に、而して何者が會てかれと交話をなし得たと云ふか。未だに語らぬ、そして遂に永遠に説明さぬであらう、かれの幽囚孤獨な前代の索性から、斯くて今私は何事をば知ると云はう。

見えるかれは啞者の如に黙つてしまひ、又は死人の如に微笑を洩らさぬ、かの如きはかれの 暗い 暗い 底知れぬ性格の一面でもあらうか。歴代の精神よ、傳統の魔力よ、知り能はぬ背景は、遂にかれをかなしいものにしてしまひ、目當もなき放浪は、結局かれをさびしいものにしてしまつた。

けれ共、かれは生存する。出發する。

目眩るしいまでに紛亂する愛情と、血盟いまでに狂躁する葛藤の、どん底に開放された一

個の原形的精神として、この生々しい現實に即しながら、かれは潔い脱却を試みそして夢みる。

恬淡無邪 ああ 風流の如く 天地を貫いて生きるかれは、斯くして今、劫初よりの大望を捧する静かなる旗手である。如何にも目立たぬかれの生活の裡に、誰が嵐の思想を想像しやう。誰が黄昏の思慕を、又は黎明の祈りを想像しやう。暴風よ、來い。波浪よ、高まれ。微笑よ、幾多關心の波浪を乗り越えて風の如く傳はれ。大願の帆よ、今こそ微笑の風を孕むで揚々と張れ。

寂しげなかれの微笑！ おお それは、現實と夢との間に介在する永遠の浮象であるか。解き難き謎であるか。いま私は感動をもつて、おお實に烈しい感動をもつて、それをさとる、と敢て言ふ。

帆立貝よ。偕て、孤獨なる私の友よ。常に寄り添つて新奇を囁く一つの影よ。

私は、今靜かに私に立ちかへつて、泌々と語つてみたい——この喧躁の眞唯中で——最も近く最も親しい未開人の感情から、とりとめもない私の詩集の表題に「帆立貝」と、その久しい思出の雅名を彫りつけてをく。

一九二四年五月

駒込 櫻觀音の書院にて

或る窪地にて歌へる

陰鬱な沼のほとりに
 孤獨な白鷺が遊んでゐる
 何んといふかなしげな幻影だらう
 しもつきの隠遁者よ
 小暗き思慕を薄日に披ひらいて
 今は訪人もなく、侘びしくのこる
 古びたる一つの石のかげに
 荒廢古都のかなしい秘密を啄つひむか

おお時よ おお空間よ おお世界よ
 何といふにがい沈黙であらう
 曾ていたづらな風のもたらせる
 亡却の名残りは痛ましい憂鬱だ
 白鳥しらとりよ 白鳥しらとりよ
 さびしさにふるえて 再びなかうとはしない
 おお 何處の何處のはてであるか
 巨車おほきくるまが今ごろごろと輪廻まわつてゐる。

花々の死

有明の蘚苔地方を

病みつかれた月が這つて行く

寂しい影だ、いつになつたら笑ひかけてくれるだらう

吁 去勢された祈りのほかに

いつたい渴を醫する露雫はないものか

人生の無記録の頁を開いて

痛々しいらいんを採用したものだ

神よ 彼女の淋しい幸福を守つて下さい

(白い花が一つ凋んだ)

幻の帆船が港を指してくる

昨日の日和、今日の日和

昨日の港、今日の港と

氣まぐれな情熱の陸上げ

短命は不思議な火花である

狂へる精神の筆をもつて

やたらに書きつけたばいんとだ

ああ 生命の薬酒の杯を一飲み干してしまをう

(赤い花が一つ凋んだ)

とろとろと眠むたげに鼓を打つて
 みづうみは仄々と白んできた
 夢の如なかんがへが
 船を泛べて 牧場を漕いで
 麓までもとどく
 笛を吹きながら虹の上を渡つて行けば
 突然誰だか 私の怪しげな記憶から飛び出して
 朝靄の彼方に没して行つた
 (そして又一つ 美しい花が凋んで行つた)

恁ふ追放者は云ふ

北風が吹いてきて、丘を越えてきて
 からつばな僕を承知で
 たそがれの岸邊につれて行かうとする

或る日、少年の時

僕は岸邊に立つて帆船を呼んだ
 若い日の夢を積んで今日も帆立貝は走つてゐやう
 ほう 北風が吹いてきて、谷を渡つてきて

枯れ枝がコキコキと合圖してゐるのに
 僕の乗る船は見あたらない
 僕の乗る船は見あたらない

一つ——二つ、心と指で數へた時
 彼女のまぼろしはちらと消えた
 手答もない目前に吐息を送つて明日の夢を孕んでゐよう
 ほう 北風が吹いてきて、僕をつれてきて
 さて誰れに引き會はせようとするのであらう
 前面は徐々にかすんで何も見えない
 何も 何も かすんで見えない

北風が吹いてきて、砂原を走つてきて
 今ぼんやり岸べりにゐる僕に
 おお この悪暗い海を渡れと命ずる。

或る薄暮の相

しもつきの野のはてに

重い鎖に繋がれて、裸形の木立が立つてゐる

何といふ長い間の瞑目であるか

何といふ久しい沈思であるか

暗鈍な空に壓されて、吁物脅えながら省みるとき

これはまた何といふ、自然と人間の、奇妙な対象であらうか

恐怖に満ちた、狂氣染みた、この愚かしき對座よ

非暗示的な一瞬よ

あまりにも唐突なる

あまりにも没理なる

そしてあまりにも自然のかゝる状態に於て

君は言葉を吐くことを敢てするか

洞察は、魔鏡だ、痛々しい反照鏡だ

見よ 私の不運な思索の小路の果てに

薄明りに、物影のやうに

巨人の木乃伊にも似た山骨に舟刳るといふ

かの狷介孤瘦の翁がイむでゐるではないか

ああしもつきの野のはてに

ああ 薄暗きわが思見の果てに
小寒い風は、まだためらつて、ふるえてゐる。

一木の歌

様々な幻影がうろついてゐる

ものわびしい視野である

「君とは誰れであるか」、ああ 一生涯

何處に斯うして己れの友を見出ださう

丘を越えて、荒々しく風は去つた

かりうどは山峽にかくれて

胸に並べた私の展望は淋しい

風は死んで、再び野は沈黙する

ああ われわれの分別のつくるところ
 ああ われわれの思慮のつくるところ
 失へる夢はかへらぬものか

闇はいつか地上に生れ

冷い石を蹴つて

忍び忍び逼つてくる

いま人生のなかばに立つて

何のたよりをば佗しく待たうか

聴け 沈黙の野のなかばに立つて

細々と瘦せたる 一木の淋しき歌

風よ 吹け

ああ風よ ふたゝび叫んで

つるの如に凜としてゑむ

かの古き精神の素頸を打て。

兀として暮るる

濕つた落葉の上におりてきて

痛める小鳥が一羽遊んでゐる

何といふたよりない秋の暮れだらう

青空の隙涯^{はて}をたどれど今日も果敢なく遠望は消えんとする

戀人よ ああ戀人よ

私の思ひに忍ぶ君の姿は今あまりに淋し

巨人の夢の如にいま山々は遙かに遠い

ぼくぼくと朽木を敲く悲しい鳥よ

新らしい風の消息を かの傳説の海邊から

再び運んできてはくれないものか

恰も幾千年もの思慕をへた如く

ああ 石は兀としてついに動かない。

鬼の如く徨ふ

空は重壓の如くのしかゝつてゐる
 流れは 胸騒ぎ 荒れてゐる海の方へ走つてゆく
 祟られた風を送つてよこす海の方へ走つてゆく
 凄い風だ 凄い夜だ
 ととても底凄い無明の夜だ

何處からか 吹き飛ばされてでもきたのか
 色も剥げた交番のボックスがころがつてゐる

そしてその中に巡査が寒さに瘦せてがたがたしてゐる
 見ればそのかげから
 迷ひでた鬼火のやうに
 ひよろ高く 危うく 一箇の報知燈がともつてゐて
 その下では赤旗がばたばたと鳴つてゐる
 ああ 見るも陰惨な橋の入口だ

これが人の栖んでゐる處であるか
 家々のあかりは嘘にももれてこない
 これが人の渡る橋であるか
 欄干は處々折れてゐるし
 橋板はすでに腐つて穴があいてゐて

めりめりと今にも轉落してゆきさうな
奇怪な 先の見えぬ橋だ

そして尙その下では

永遠の晒し舟が

孤獨に吐いてゐる

何となく胸の竦められるやうな夜だ

底も根もない懷疑が ほうほうと大地を隠してゆく

かゝる時 おお誰れかが

祟られた橋のたもとで稻妻の如に叫んでゐる。

一つの喜び

疎林を見てゐることは喜びである

寒い寒い空の一端へ

刺さる如に伸びていつた精神を

喧躁を離れ、靜かに 孤獨に

睜めることは私にとつて一つの喜びである

私の魂が淋しい一つの星であるなら

あの細々と瘦せて高い一木の梢の尖に

美しく美しく咲いて離れまい
 ああ 今日の夜も明日の夜も
 さうして消えない合圖とならうに

疎林を見てゐることは喜びである

痛ましい冬の風を越して、吹雪を送つて

或時は沈黙 或時は堪えられぬ堪えられぬ音楽

静かに聞け！ おゝ静かに静かに

疎林に魂を注ぐことは 私にとつて一つの喜びである。

頻 死 の 海

夕 海邊に立つて呼んだけれども

私の聲音は小さかつた

濱の娘等の

昨日うたつた唄を思ひ出して

はるかに沖を呼んだけれども

私の歌聲はとゞかなかつた

鷗よ

離れ島の如に淋しく

私の展望のはてに浮いてゐる

濱のむすめらよ、ひとり ふたり

忘れ物を取りに戻つて来ないか

ああ 鷗は暗に呑まれやうといふのに

いまかへつてくる舟はないか

怪しい胸さわぎを乗せて

濱風よ 舟を出せ

溺れんとする島影を呼びながら

ああ 防風林がしのぶ如に吠え始めて

永遠の警報旗がばた／＼と空中に鳴つてゐる。

狂へる夜の追想

見てゐましたか、瘦せた／＼一人の男が

骨の如な杖を振りまわしながら

青い顔して

今日濱邊へ下りて行つたが

何んだか淋しい夜になつた

魔法提灯を幾つつけたとでもつけ足りない

引き窓を閉めてくれよ、入口の戸締りはいいか

狂へるいくさびとよりも劇しく雨風が襲つてくる
遠く近く足する音

爆竹の音、せわしげに物叩く音

荒れ屋敷を取り巻くこの物凄なもの音よ

今どき誰れか戸外に立つてゐはしまいか、しよんぼりと
怖ろしい暗示者は何處まで來たらう

ああ 黒い海の怨霊がもうやつてくる刻限だ

がたびしやと雨戸が鳴る

戯れに火を見せてはいけない

地獄は喜ぶ——眞夜中になれば

かなしい女の髪の毛が

かなしい聲の如に震えてくる

間違ひがなければいいが

ああ 北方の海に埋まつてゐるといふ青鐘の音だ
眞夜中になれば

人間の肉身にけむりついて

いくつのはかないしやりこうべをつくつたか

彼の男はついに飯つて來ない

何んだか淋しい夜だ

青い顔が風の如に消えていつた

枯れ枝の如にさびしくくだけた骨と杖とをのこして。

病
院

(.....)

落ちつかぬボブは そら 窓を覗いてゐる。

露
雫

蜘蛛の巣が

べとべとの蜘蛛の巣の影が

重壓の如く

混味の私にのしかゝつてくる

その時だ しんしんと夜は更けてゆき

狂へる思ひに疲れて 正に昏酔に陥入らんとする

私のあるかなしの心に

たち たち と

怪しい網状の亂線をつたつて落ちてくる

冷たい冷たい雫

さんらんと星の散らばつてゐる

落ちつかぬ真夜中

雨だれの如く

淋しく 何かの兆候めいて

たち たち と私の棄我の心に滴れてくる

血潮が 血潮が

夜な夜な變化情へんげじやうに流浪する

私の最後の心こころを捕へて 目指して

たち たち と滴れてゐる冷たい雫

ああ 滴れてゐる 竦つとする夜露の雫。

古井戸に封ぜる秘義をあかす

古井戸にいつか蔓草が生へ

するすると忍んで垂れてゐる

ひつたりと板の朽ち目に

身を吸ひつけてゐる

小さき蜥蜴幾匹

幾日 幾月 幾年

さうして續く不眠状態

陰氣な水を舐めてついに苔生へ

ああ空虚　ああ落寛

皺枯れた一つの聲を

永遠に封じたその中に

兀として坐する

青蛙は井戸の哲學者だ

幾日　幾月　幾年

さうして續く觀念又觀念

ああ　念すれば扱て何も無い

默定せよ

停思せよ

世界を拂つた大暴風の後に

人々よ　いま一度淋しくのこる古井戸を覗いてみたまへ

何も無い

何も無い

ああ　燦として日輪骨を射るとき

永遠の一息は無に於ける一つの聲だ。

破芭蕉

十二月よ 寒の夜よ

こんな薄暗い部屋の中で

君よ 苦惨な生涯を私に囁くがいい

いまとなつてみれば

過去は懶い疲れだ

冷たい椅子に腰を据ゑて

扱て手に取る一卷の物語もない

あゝ 只瞠目して私は陰氣な物思ひに沈んでゆく

美——子よ

美——子よ

こんなたよりない風景のはてに

今は佗びしい一つの立像であるか

風は吠えて

遠く 遠く、怪しく 狂はしく

ふつと消えていつた

ああ 心のまぼろしも今は消えて

私の空虚に訪れ

私の淋しい窓を叩くのは誰れ

竦ッとする豫威の稻妻が

私の亡ぼうとする心霊を刺す

兆きざしよ 孰れにもせよ

私の待ちに待つたよりであるか

ああ 怪しい胸騒ぎを抑えて窓を引けば

破芭蕉 破芭蕉 そして何も誰もゐないのだ。

原始時代

— 1924 —

多言多慮 轉不相應

絶言絶慮 無處不通

(信心銘)

「原始時代」序

私は「原始時代を所有する」

「原始時代」は、私の誕生地だ

「原始時代」は、私の往生地だ

「原始時代」は、私の甦生地だ

げに、この一元粗朴なる大願の眞唯中に於いて、私は私自身を、充分に、完全に、費消し且つ獲得する

私は、一箇の「原始時代」を所有する

當來世紀の劈頭に於いて、果然！ 人生は何事を絶叫するであらうか。回顧せよ、沈思せよ、而して敢然と發想せよ！ かの聖靈を追求する太古人の現象から、あまりにも實在に固執する近代人の幻想にまで、まことにやむことのない混沌虚無の一面貌を、嗟！ 文明は、汗だくで運んできたのか。かなた雲霧に閉された蒼白い岸邊から、猛鷲の如な精神をもてこの大地にのぞむ、大時代の覺足を聴きながら、寂かに、斯く私は眩く——
——萬象の精神よ、一先づとつくりと私に還つてきておくれ

——諸々の靈魂よ、一先づとつぶりと私の内の内に迄沈んでおくれ

——この光輝ある反逆のために、人生は、人生は、そのまゝ、充分に開ひられる名譽革命を見るであらうから

北方に、寂かに燃える感情の花火だ

かくて私は、私の無二の莊嚴旗を「原始時代」に樹てる

かくて私は、私の第一歳から始める

かくて私は、私の地上の第一歩を踏むのだ

見よ、觀よ、歡迎の風の間、如何にも縦まゝに鳴り響く澁潮たる私の感情の片鱗を！

ああ げにいま私は、私の「原始時代」を所有する

一九二四年十二月

星が頻りに窓に囁く 西ヶ原の窪地の部屋にて

釘を打つ

匣に肖たたてものが

凸凹と並ぶけしき

どつからも光射はなく

仄暗い黄昏の露路ではないか

孤獨な蘇鐵が立つてゐるあたり

奇訝おかしな符牒ふだの如に

窓が一つ出張つて見える

をののいてゐる眼玉の如に

「有漏 有漏 有漏」と

どこかで鼻が啼いたら

化物おぼけの如な人物が其處こゝに立つよ

しつぽを垂れて

かなしい一匹の老犬が

黙として靡かぬ蘇鐵そてつの側で

纖細かほせいその手首をねらつてゐる

ああ 一本の釘を持つて

出口もない、入口もない

そして何處までもたよりない

このかなしい光景の中央に

私はくるには來たが

一個の「幸福の塔像」を

偕ともて、どこいらに建てたものだらう 吁。

頌歌

(かのひとは、まことにたゞ「還愚痴」といひき)

これはこれ不知の行なり

これはこれ水の香氣にほひ

これはこれ風の囁聲ささや

これはこれ一草の憂愁うれひ

これはこれ一木の咏嘆なげき

これはこれ森の叫喚さけび

これはこれ谿の反韻ひびき

これはこれかなしき鳥の喜悅よろこび

これはこれさみしき獸の坤吟うめき

これはこれ冷たき魚の希願ねがひ

これはこれ切なき魂の呓語つぶやき

これはこれ靜かに憤る大蛇の炬火かろうび

これはこれ寂かに轟く大地の戦慄なわばり

ああ げに これはこれ非行の行なり

(かの人は、まこと只「一文不知」とこそ言ひき)

青蛙面壁

宇宙を抱いて

膝の上につけて

兀として坐り込んだ

青蛙 見ろ 青蛙

何處に性を置いたのだやら

かなしい蟲なら

もう我慢が能きない

冷やかな壁に面して

端然とうそぶく

小癩な面は

思想は、又しかも尨大いよ

ああ 流 流 と歳月は歩むのに

動かばこそ宇宙を抱いて

膝の上につけて

ゝとしていつかな坐り込んだ

青蛙 見ろ 訝しな青蛙。

毒 箭

終夜 私は毒を塗る

強度の光にも熱にも變化かわらない

透明無色の精神をもつて

一本の矢に 毒を塗る

而して、この一本の毒の矢をもつて

きたない「おれ」をぶち殺すために

私は、のんどを

このあたゝかい長い間ののんどを貫く

ああ いま鬼でもまた地上の人間でもない

私は、やがて太陽系の中心で

訝しい一本の矢を手にしてゐる

かのげにも高貴な王子を見る。

旗を擧げる

屋根の上に

ひらひらと旗を擧げる

いつからとなく 憂鬱は

私の几上に凝る

日中、蝸牛の如な沈黙をもつて

恰も何か呼ばうとする

ああ 蒼白い氷河から

永却に立ち昇る

霧は深いよ

今、かなし觸手をさしのべる

思想は かなしい思想は自然に

何を 何を 呼ばうとする

吁 悵鬱な時

工房の屋根の上に 旗をあげる

透明無色な魂魄の如な

一流の旗を私は揚げる。

大望

一草に囁く風よ

一木にさわ鳴る風よ

洪水の如く 私の中に満ちて来い

そして、虚空の如く

私の思想を膨らましてくれ

ああ 野の中に今しよんぼりと立つ

私はさも小さな草の如に素直で

また一本の瘦せた木の如に寂しい

天よ 地よ

けれ共、私の希望は烈しい

ああ かの草に囁き

ああ かの木に鳴る

風よ

さも虚空に似た大きな思想よ

満ちて来い 満ちて来い

大洪水の如く いま裸形の私に満ちて来い。

不死鳥

洞穴を出ろ

と、誰か

一しきり私の部屋を叩いてゐる

或る夜のこと

まどろみのまゝのやうすで

ふと、立ちあがり

うとましき影を追ふ

ものかなしい形の如に、私は

そつとそつとその物聲のあとを跟ける

轉想の窓から

ふたゝび、洞穴を出ろ

「虚無の洞穴」を出ろ と

おろおろとまだ呟いてゐるのは

狂ふやうに諸行を念ずる

鬼 鬼であるか

ああ 遂に失はれたる

魂よ

影を追ふ切なげな形して、私は

よろよろといま跟けてゆくなり

不死鳥よ

秘めたる奇しき一卷の眞言を
 どこからか降りてきて傳へておくれ
 闇に、尙黙黒と立つかの塔像に
 かゝる時、ああ 恚ふ私は告げる。

樹上の魚

不老の男ありけり
 昔、東方の名もない山峽に
 好みて一人暮らし
 美しい葦の間に
 ああ 月を釣る男かな
 今、夢の如く幻の如く
 そして夜となく晝となく
 私の密房にひらくのは

かの印象遠望です

私は最早や經典を讀むに堪えない

私は最早や考へることに堪えない

ああ むすぼれた私の心から

きびきびとそして逃れてゆくのは

幽棲の私の窓に映る

小氣味よい一本の常葉木に洩ぐ

かなしい一尾の魚だ

願望を秘して風は動くか

なむなむと波はうつるか

匿れたり、見えたり

この生々した風景の中に靜かに 跳ね

初々しく跳ね 跳ね

なまぐさい私のこゝろのさき

それは實につめたくふれる

魚 實正

生きてゐる 魚

樹上の魚

ああ 恰も觀世音の如く

崇拜する、私は 私は 私は

今はたゞそれを崇拜する

氷河期

窓を絞る

つめたい氣雲は

澎湃と ああ 結氷する

私は、季節を持たない

おもしろい節序を知らない

私の感情は、忽ちにして今不透明なる

見よ！ 何處に

聴け！ 而して何處に

皋 と呼ぶかの音聲は

遮面に 極遮面に觸れる

顫狀薄光

射情 射精 超・戀愛の放射光

私は、とばかり夢みる

而して微明にたよる

死の 否 頻死の私の情筐は

更に搖震、更に戰慄

ああ 永遠に 永遠なる

一個の塔像を

「こゝに」

げに今こゝに私は建てる

窓を 窓を 絞る

つめたい氣雲は

かくて、ああ 茫漠と結氷する。

(以上は第一門「人間秘行」より)

月光曲

穏やかに寄せてくる波の音は

静かに 私の舟を梭つて

どこか遠くへ消えて行く

ああ 麗月は微笑せず

どこか遠くへ傾むいて行く

深夜に 私の心をいつまでも醒まして

湿やかに打つてゐる、ああ 微明^{かすか}な音は

狂激に かゝる時、あまりにも不意に

仄明^{はのが}な私の心^{こころ}を捕へるのは

あらしだ 森に叫ぶ稻妻だ

ああ 氷刀を懐いて戦く

下界の囚人だ 私は 地上の鬼だ

錨を投げて ああ 今は言葉も封じた冷月は

狂激に 一個の幻に戯れる時に

やがて、けむる如に降る雨ではないか

しつそりと舟は濡れ

ああ 月下碧潭の央^{なかは}に

しつとり沈んで行く そこに

私は ああ 私の心は

再びぼつちりと現はれ

そして雫の如にいま光るではないか。

木 賊 林

こゝは夏をも知らぬ蘚苔地方
 すたすたと地錢（じせん）の上を私は素足で歩いて行く
 初々（うい）しい 清々（すが）しい 何といふ匂ひだらう
 滑らかな 艶やかな 何といふ觸感（はたさわり）だらう
 青い青い生き者の持つ特異性は
 そして何といふ鋭敏な何といふ至静（しじやう）な韻（ひびき）だらう

私は輕快な裝束（いでたち）で日向葵（ひまわり）の咲く土地からやつてきた

咏嘆は、月夜の森に封じてしまい
 激情は、疾踪の川に流してやり
 鬱熱は、荒蕪の砂原に埋めてしまい
 そして華麗な一つの憧憬（うらみ）は
 思切つて轉落する太陽が抱へる如に持つて行つた
 今は遠く喧鬧を逸し、私は悉く快適な精神で
 爽やかなこの苔徑（こけみち）を見出て辿る
 私の周圍から、そして麗はしく絡はるものは
 微かに切なる地蟬（みづせみ）の曲調だ
 ああ 遙に日月の煩亂（わづらひ）すらも及ばさない
 私の邊土よ

涼冷な眺望よ

青々と目醒める立林よ

點景の白雲は、さうして秘に私の衣囊から

ああ いま微明に射してくるのは幽人の情だ

同行よ 愛する私の同伴よ

偕て、いよいよ此處木賊の林へわれらは這入らう。

美女微笑

微かに鋭く叫ぶやうに

泣いてゐるのは何だらう

眺むればさも荒涼

夜のとーぶるは高原のやう

かなしいまつちは幾度か消え

弗々と畸異な言葉が私を掠める

さかさまに吊るさがる一羽のかうもり

鬱々と羽を擴げて

滅入るやうに地べたをみつめる

一株の蘭に

切なげに囚はれてゐる一匹のかまきり

私は 私の熱情は……

微かに鋭く叫ぶやうに

囁いてゐるのは何だらう

あたまの上で 妙

青・青と脈打つてゐる 血潮は

さめざめとめぐつてゐる らんたんは

ああ この死人の如な部屋のやうす

「わたし・わたしは・こうふく……」

けれ共それは涙であるか

壁龕の瞳にあやしく光る

美女微笑！

ああ こゝは言葉の亡びたところ

そして一つの窓も持たぬはくめいの部屋である。

暴風の夜の寂寞

伏兵は密林に匿れてゐる
 生き者のことばをのんだ一瞬間
 大きく闇をゆすぶつて 巨鳥が一羽飛ぼうとする
 何といふ怕ろしいしづけさだらう
 凶變の前兆のやうな
 地獄で叩く鉦のやうな
 一箇の風鈴がかなしく鳴る

「ねえ・どこに不幸があつたんです」

音 閃めく音

槍のやうに落ちてくる 騎馬隊

蹄の音 鋭い 烈しい 劔戟の音

なだれの音鳴り

天は 地は 萬物は

どこへ轉じてゆくのだらう

謐つ 極地にきけ 魔の影のやうに鳴つてゐる

ああ 羽叩きの 寂しい音。

えは・ぐりいん

薄明のすたんどにイむで

忍ぶやうに泣いてゐるのは

薄光線

慨嘆くなよ 靈魂

かなしげに顔えながら

物言はうとする孤獨の影は

常縁

低泣くなよ 愛憐のつれ

あまりにも突然に ああ 運命は

われらのために用意する

死型床

だが、永遠の吐息する夫は吾等の匿身所だ。

不老華

穢ない壁のすまつこで

泣きじやくつてゐる

ばてれん門徒

出て来い

こちへ出て来い

梵唄まじりの唐術かたくりを

浮いた 浮いた 骸骨踊を

影法師といつしよに始めやうや

かなしい嗜みだ

『どつかへ、木犀を差して置いたね!』

邪法を封じた書棚と

いつまで面坐しても

私は一枚の經文けうもんをもおぼへない

さあこの無情の溫度器を

どの柱へ掛けて置かうか

ああ 密房長夜

たゞ龜の如く狂亂をかくし

また酒を呑むべし。

夢中占卜

鼈甲縁の大きな眼鏡を

こちこちした額にのつけて

剽逸な鬪體だ

どつから持ちだしてきたのだらう

これはまた 古々しい望遠鏡を

いま眼窩にあてがひ

窓から そつと宇宙をのぞく

ああ 天地の面は大きいよ

晝なら 鴉 華を散まいて
夜なら 蛇をろち 水を洒いで

ぶつ ぶつ ぶつ と

朝から晩まで晩から朝まで

かなしい淨土を莊嚴する

華經文を吐きながら

性も怨念も今はあつさりと忘れたらしい

秘行ひぎやうの鬪體よ

ああ 楕圓形の窓の部屋で

一體何を 何を君は占卜する。

暗夜秘行

どうもだゞびろい水族館だ

せつかく幽棲の人魚のそばで

提灯御無用

顔を赤らめた鬼灯ほ・つきは

何といふ冷たい根性だらう

一粒千兩 一粒千兩

ぶつぶつと呟いて行くのは

例の火喰鳥ではないか

青蚊張を吊つたら

一體何の魔除けになると云ふのか

どうもせつかちな雷様だ

大木から飛び降りて

暗夜 そして明るいまちまで行くのは

稲妻だらう 稲妻だらう。

運命の遊歩場

巨大な動搖を天地に填めて

風は淋しく海に下る

平原に、炎の如く

猶燃えてゐるのは草叢

青空は微かに戦き、荒海は煩躁ち

魂を投げ出して太陽は没落する

見る限り、何といふ腥い景だらう

迷帆よ 迷帆よ

かの際涯に、遠く私の想を懸くるところに
 ああ 只一羽 小鳥のやうに歸つてくる
 一つの影も泛んでをらぬ
 何といふたよりない待望だらう
 何といふ佗びしい佇立だらう
 こゝは私の徨ふ蕪寥の邊土
 「こゝは・わたしのイむ樹蔭の道です」

愛憐の伴侶よ

私の側に、あまりにも近く

あまりにも激越な叫びを呑んで

立ち竦んでゐるではないか

彷彿と一つの影が現はれて再び静かに消えて行く時
鬱熱の木の隙間から

涙の如に、若しくは血潮の雫の如に
滴り落ちるのは何だらう

何時までも纏ひのこる寂しい微笑よ 微笑よ

ああ 黄昏は私の幽囚うねえを乗せて

今は遠く霞み去る信天翁あはちどり

何といふ運命的な出踪へただらう

何といふせつなげな映像まぼろしだらう

ああ こゝは私の行む薄明の領地とら

「こゝは・わたしの彷彿う薄命の列樹路れつきじろです」。

(以上は第貳門「鬼界散華」より)

地球の極から

荒々しい風の果てから

ぼつくりと半月が泛んだ

見ろ 眠られぬ都會の上に

痛ましく傾く一つの影

草木は狂亂、家々は戦慄

そして夜光蟲ひかりむしの如に燈火は明滅する

私は——私の情熱は

開いたり閉ぢたり

たよりなく舟槽ぐ景さまです

星々は沈黙、夜天は静寂

いま錨を投げたのは半月だ

悲鳴する地球の極はたから

冷たい眼玉のやうに昇つて行つた

かなしい精神よ 封言の木乃伊よ

ああ 点滴しづくの如につたつてくる

碧潭に沈む快い音を

跼蹐ろくそくり目を閉ちて私は何時いつまで待つとしやう

あまりにも苛立ちあまりにも落着かぬ大地の上で

切なげにからだをゆすぶつてゐる

ひよろ長い蜀黍もろこしの間から

やがて猫の如に背伸びをしながら

立ちあがり、目をみはり

私は思はず獨語つよやいたことだ「錨を舉げて……」

「何處へ ああ 何處へこれから發つとしやう！」

寂寞の幻

橋のたもとで

狂ふやうに叫んでゐる

風 風の中から

「俺は 俺は 俺は！」

とあたかも、遠い遠い荒れてゐる海の方へ
今ぶつつけてやる

あれは あれはなんだらう

物淋しい音を立て

落葉が一しきりぶつかつてくる

窓 格子窓から

「俺は 俺は 俺は！」

と果して、この明るい私の部屋をば
氣味悪く覗いてゐる

あれは あれはなんだらう

ああ 固く窓を閉ざして

黒艦の如に錨を投げる

寂寞 深夜のあらしの只中から

「俺は 俺は 俺は！」

とたしかに、遠く寒く
 けれども爛々と私の密房を明るくする
 あれは 一體 あれはなんだらう。

夜に聴く

古に

怪し 聲あり

只一音

想像地獄に

何者の呼ぶ音聲

ああ 不思議なる

深夜の言葉

激越な叫びなり

想像創世に

天地を裂いたる

咒文か 呪語か

只一音

ああ 去る日の古井戸に

投身する如く覗いてみた

それはかなしい一箇の鬼灯です。

緑の下蔭

うらかなしい花の如に

たつた一つ咲いてうかんでゐる

奇體な 帆船

霧をくゞつてきた如に

ああ 蒼白い貌を擧げる

こゝは 廢れた港

ああ 蒼白い冰河の地方に

木乃伊の如に秘便を待つてゐる
奇妙な 馭者

あるかなきかのかなしい心に
遠く夢幻の花火を揚げる
こゝは 緑の窪地の街

薄明のそゞろ歩きに

運命の護符を嚙んでゐる

奇怪な 偶然論者

静かなる嵐の如な憤激に

いま 憂鬱の杯をぐつとあげる

偕てこそこゝは ああ 忘られた都會の筈。

影 と 形

なんと云ふ長い瞬間だらう

なんと云ふ短い時代だらう

そうそうと三十年は消えてしまつた

物凄い雷鳴は何處の極だ

烈しいあらしは一體何處の果てだ

その夜 楕圓の池の中に

幽かに泛びでた影と形よ

あまりにも生活から懸離れて

捕はれてゐる運命の蛙であるか
 地から天へ 矢の如に
 鋭い觀念が發していつたが
 結局、知るとは誰も云ふまい
 快い搖振と共に
 夢の如な眩暈と共に
 極めて果敢ない一轉を繰り返へして
 おお もうらうと恰も三十年は消えて行つた。

古風な夜

青葉木の奥に囁く噴水の音
 音、人の氣息のやうに降つてくる
 青い檜の葉よ 點々と
 雨の如に 涙の如に そして鋭い放射をもつて
 魂は彷彿と斜に走つて行く
 明仄へ 靜かに呻る風の中を
 點々と歩き出してゐるのは
 孤獨な一個の浮浪人だらう

おお 朧ろげな奇蹟よ 次々と
 濕つた地面に爬ふやうな蹠音だ
 半月は青い空間から
 錆びた葉鐵のやうに吊るされてゐる
 何處に淋しい性が笑つてゐるやら
 いつか時代の出窓に忍びでて
 昔の琴を爪弾きながら
 泌み泌み木乃伊などの歌ひ出す夜だ。

魔 神

立木が線の如に鳴つてゐる
 尨大なかんがへをふところになぢこんで
 風の中を走つてゐるのはわが太陽だ
 ひやう と放つ一矢
 太古の名人が何處から甦つてきて
 くつきりと天と地とを分つのだらう
 燃えてゐるのは池 吠えてゐるのは森
 そして幾度か蠍の如に叫んだのは猶生きてゐるもの聲だ

魂よ 眠むつてゐる海であるか
 いま諸々のたよりは一つとなつて
 風の中に投げられた黒子の如に飛んで行つた
 魔の風よ 魔の風よ
 北方から未だにきこえてくる
 おお 猛鷲の羽叩き。

人間素像

青々と眠る大虚空の眞只中に
 一帯の巨大なる碧巖が聳えてゐた
 この世界の創始期に
 猛々しい一人の神が
 坐して其上で印呪を結んだ
 霹靂一閃 物凄い動搖ののちに
 巨巖は眞二つに分裂
 天となり、地となつた

如何に長い間、そして地上は荒廢に飯してゐたのだらう

わたしは・愛してゐる——陽神ひのかみが云ふ

わたしは・愛してゐる——陰神つよのかみが云ふ

或夜のこと、輕快な一隻の帆船が

そして迂るやうに大地を指してやつてきた

恰もこの時天と地との間に

美しい帯の如に横はつてゐたのは

あの巨大な碧巖の永遠の影である

黎明に、嘹唳と地上におこる物聲は！

鳥類は飛び・歌ひ、獸類は走り・吠え

魚類は跳ね・踊り、山は、川は

そして草木は、今これ光輝の一體を頷して悦ぶのだ

おお 何物がこの寥原に發する一體に

かの豪奢な太陽の精神を置いたのか

おお 我が魂の崇める唯一體よ

おお 人間素像。

大 都 市

寂寞の夜の塔柱は
 瀕死の街の空高く
 復讐の巨手を舉げる

恰も終焉を吐いて
 街樹は落葉する 淋しい刻限
 無量三千の電線が
 すとあから ばんくから
 そして諸々の巨大なるびるでいんぐなどから

封せられた街のたよりを叩く
 私の心に
 ああ、……しかく鳴る
 空に 紺青のこの空に
 星をばら散け
 華漬水を打ち揚げてやれ
 ああ 蒼白い氷原の上に
 花火玉の如に轉がつてゐる
 病める魂の泣きよ
 見ろ 見ろ 「幻覺の塔」から
 空中遙かに高く聳え
 一本の無旗の圓柱が立つところ

ああ 私の「観念の都」が顯現する
 御身よ いま「陸の街」と云はうか
 御身よ いま「海の市」と呼ばうか
 否 否 實體もない
 寧ろ強く 「虚空の首都」と稱へやう。

ああ 寂寞の夜の市の戦慄は
 私の心の突端に

今こそ、超弩級の大都市を建現する。

(以上は第參門「光明發端」より)

大地に湧く

丸木橋の如な細徑を

どこまでも辿つて私は行く

妙なる星明り

都會の隅處から

人目に見えない梯子をかけて

私は夜天に昇つて行きたい

つゞれさせ つゞれさせ

草の葉で、も着更へを一枚

そうだ、私はとくに持參しやう

つゞれさせ つゞれさせ

かなしい虫よ さやうなら
 ではほんとうにさやうなら
 とは云へいつまでも忘れかねて
 私は戻つてくるかも知れない
 素足に觸れる土の感じを
 私はどうして忘れられやう

ああ 一生一代

この地上の窪所くぼみから

若い妻君の窶れた聲音を
 天上にまで持つて行つて

私は忍びやかに唱へてゐたい

「つゞれさせ つゞれさせ つゞれさせ」と。

蟲になりたい

星の降る夜に

しつとりと露に濡れて

蟲になりたい

恁ふ眞劍に私は思ひつめる

ああ 果して不思議が存在するなら

余りにも醜く、聽かれる言葉と

余りにも怕ろしく讀まれる文字とで

このよ妙なるこのよ稀なる

調べをひとつ創つてやらう
 星の降る夜に
 草叢に匿れて
 しつとりと露に濡れて
 ああ 私は
 眞剣に慙ふ思ひつめる
 蟲に、蟲になりたい
 美しく美しく鳴く蟲になりたい。

悲しき畫像

一つの影は
 秋の夜に放浪する
 馭者よ、霧地にやつてくれ
 きりすたん・ばてれんの嬢さんが
 こつそりと
 いつか歌つてゐたやうに
 秋の夜の流離の心は
 楕圓の窪地街を見おろす一つの窓から

黒い幌馬車を駈つて

せうせうと出で行く美しい夢であるか
きりすたん・ばてれんの嬢さんが

夜明けには何と歌うだらう

青桐がしきりに招く道をつたつて

馭者よ、奇妙な馭者よ、幕地にやつてくれ
あらし吹く瞑府の窓から

腥い一個の晝像に肖て

わが影か 魂か

かなしみの街々に、泌々と放浪する。

秋 海 棠

こゝにこつそり人を呼ぶ

さゝやかな湿めやかな情燈

一つ吊つたり

小女よ 小女よ

水鳥のイむ邊はぎりから

忍んでくる風であるなら

屹度そなたを見つけるだらう

秋深し ああ 尼寺は淋し

小女よ 小女よ

かなしい行ぎょうに囚とらはれ

今は極秘のねがひをほんのり

ああ そのいちらしい貌かたちに染め

そして可憐かわいにたゞ唇くちびるの顫ふるえるまゝに

こゝにこつそり私わたしを呼ぶ。

べごにや

べごにやよ べごにやよ

あをいあをい八手やっての葉はに

湿々と雨降る夜など、かなしい囚居とらの出窓でから

いつも爛とろれた嘆息なげきを洩とらしてゐる

その薄暗うすくらい祈禱房いのりばやから忍しのんで来て

しんみりと古い情話じやうわでも聴かしてくれよ。

鳥

夕になると、何處からかやつてきて

鳥は貝塚の上に遊ぶのだ

一羽である

生き物の 何といふ悲しい感情だらう

生き物の 何といふ哀しい生命だらう

昨日もほじくりかへし、今日も亦ほじくりかへし

永遠の一塊は遂に明日のことだと

いつまでも生きてゆく 鳥よ

だが不幸な影は側に立つて

いつも切なげに泣いてゐる

雨でも降れ、あらしにでもなれ

火靈を抱く木乃伊の秘密を

かの巫女の如に盗みたいから

夕になると、何處からかやつてきて

鳥は貝塚の上に遊ぶのだ

ああ それは無類の一羽である。

あつはしゆろらん

月が入江に這入つて来て
 夜がいよいよ青くなると
 をとめ をとめ をとめ
 青い月夜の丘のをとめよ
 忍ぶやうに泣くのか唄ふのか
 あつはしゆろらん

もしも私が美しい一つの星であるなら

青い若葉に今宵は宿かる露ともならうに
 ああ かくも高貴に瘦せてのびたる
 あつはしゆろらん
 かなしい虫の切なる一曲にをくられて
 汀へ 海へ おりて行くのか

吊舟の如に泳いでゐるのは 月
 漣の如に鳴つてゐるのは 微吹風
 ああ をとめ をとめ をとめ
 青い月夜の秋のをとめよ
 いま忍ぶ如に踊るのか狂ふ如に嘆くのか
 べらぶどよ あつはしゆろらん。

山嶺行

どこまでも深さうな
 山峽へ這入つて行く
 獵人の影
 木立に遮られ
 林に匿れ
 遂に、遂にたよりない
 吁 あまりにも夫れは單なる影
 秋の日光は

どこまでも寒さうな
 山峽に這入りかゝる
 落葉路を隈取り
 遙かに追慕する
 彼方 しろしろと辿つてゆく
 時折り、裸木を裂くやうに
 山鳥は叫ぶけれ共
 行方杳かに今は知らず
 ああ凡願 千里の風の如く
 繞つて往かう
 嶺へ
 かの白雲と化す嶺へ。

烈風に駈して

うわある・どう・うをる・うわあ……
 うわある・どう・うをる・うわあ……
 何といふすごい風だらう
 かなしい單ひよつの吊床ひよつの如に
 私の部屋は烈しく揺れる
 天と地との間にぼつちり
 私の部屋は烈しく揺れる
 かなしい隻ひとつの匣舟ひとつの如に

何といふすごい風だらう
 蒼昊あをぞらの何といふすごい騒さわだらう
 うわある・どう・うをる・うわあ……
 うわある・どう・うをる・うわあ……
 荒波に落した獨ひとつの瞳ひとつを奪ふ如に
 狂くるひ選せんれ、ぐるぐると廻れ
 うわある・どう・うをる・うわあ……
 怕ろしく 鋭く
 瘦しせて了しまつた私の精神は
 哀しく 猛く
 尖塔せんたつに光る避雷針ひらいしんを傳つたつて逸よして行つた

北方人

— 1925 —

「追放悲給」から十四篇を「晴房秘扇」から十六篇をこゝに納む。

124

うわある●どう●うをる●うわあ……

飛べ、遙かに高く

天帝のもとへ参する密使の如に

おお 烈風に御して高々と飛んで行け

かなしい私の精神よ。

(以上は第四門「大地莊嚴」より)

「北方人」序

「北方人」は、原始時代に蘇生した魂の無限自由の展開である。今、何處に於て如何なる方向を探るかば、私も知らない。只彼は、滾々として盡きぬ人生の秘義を、抱む一介の「不老人」である。

彼は、沈黙具性の意志と、激越猛鷲の性情と、そしてまた高毅日月の精神とを持つて、現實世界に一浮一沈する。

男性よ、弓を引け！

女性よ、快い晚餐の用意をなし給へ！

性の燎火は凱旋の第一の門である。

性の合唱は凱旋の第二の門である。

性の輪舞は凱旋の第三の門である。

一度は懺悔の矢に貫かれ、再びまた莊嚴の旗の上に棲る、ああ彼こそは、げに現實の血潮に咲いた一輪の花でもあらうか。

すでにして「北方人」は、常勝將軍の如く、孤高な避難者の如く、歡迎の、嫉惡の、呪咀の、偏き發遣の地にまで現はれる。かなた冷嚴の岸邊を遺放された大慈の船であり、また虚偽・汚濁・あらゆる人情に異反する不敵な禱房の、夫れは極秘の呪扇である。

人々よ 運命の魔符を吞め

然して、かなしい人の世のさあもんを靜かに唱へやう！

一九二五年十二月

江東の畔り 人情の部屋にて

燐 光 圈

北●方●的●な

餘りにも北方的な

霧の夜は瞑想する

ああ 荒廢地方の岸邊から

凶鳥の如くさみしく

翼音の如くかなしく

近寄つてくるのは何だらう

默然と立ち昇る 靈魂よ

ああ 遠く 寒き

いまこそ、その出●發●を●認●識●せ●よ

不●知●火●

そは蒼白い黎明であるか

そは幼稚な發端であるか

生命よ

夢幻よ

うらぶれた二十五年の生活から

見よ！ 睜よ！ 運命の巨鏡に

現在潔ぎよく創造する

可憐な 可憐な 私の姿似を

ああ 刹那の奇蹟を

氷原に咲く

れいろうの花よ

つめたい思想よ

ああ ひすてりくな叫びを舉げて

疾風が迂り落ちた頻死の鏡面に

戦慄する 鬼火よ

「生命の單素」として

ほんのりと花咲く 極微よ 愛しい自我よ

ああ 遠く 寒き 憐光圏内から

いまこそ 只一度の朝紅を私は見る。

挑 戦

まかせだ、然り、魔風だ

歩哨よ

北方の窓は狂ふ如に鳴る

——叫ぶ！

僕は巨大な本棚の蔭に

軀をひそめ きもを錬る

歩哨よ わが第一戦の哨兵よ

敵は 敵の主勢は 何處だ

目指す敵は

敵の御大將は 何處だ

如何にも短兵急に

もうせんと僕は立ち向ふ

さあ 風

君に挑戦する

さあ 風 僕は君に

果^{はたしじやう}状をつけた!

さあ どうだ この卑怯者

名乗れ

「吾は太古じや」

「予は中世だ」

「私は近代です」

悪魔奴 勝手に名乗れ

僕は仁王の如に立つてゐるのだ

もう、紙砲などは捨て、了はう

女性よ

僕の背後から

讚美の歡呼を轟かしてはくれないか

ああ 身を呈して北方の窓に突立ち寒がる

僕はいま頑として好戦人だ

散華頌

訪人の影も非ぬ
 寂しげな地方だ
 曾て、微笑を封じた不思議な塔が
 音も無く聳えてゐた、と云ふ
 こゝは蒼色のとある圓丘
 草原は動かぬ、蒼天は動かぬ
 嗟 不死の風は何處を徨つてゐるのだらう
 今、大頽雪のやうに
 「時」の只中に没落するのは

曉鼓だ！

味爽の空に韻く

諸もろもろの精神と共に

黎明の童子は静かに起つた

今、何といふ和かな合唱だらう

今、何といふ安らかな貌だらう

獸らよ驅れ、鳥らよ翔べ

ああ この落附ける風景の中

童子よ

今こそ朗らかに梵唄ぼんはいを誦みながら

「生命ぶらめしのかうすの華」を散け。

窪地の窓

はて、何かしら

稲妻の如に虚空を通る

聲 聲 聲

深霧だ

小歇みないあられの如な

ころよい鼓秒のさ中だ

鈴を振れ

窓 窓 窓 窓 窓 窓

鈴を振れ

遙か認識の彼方に迄

もろもろの新奇な「生活の鈴」を振れ

打ち振つてやれ

一時に、振つてやれ

明仄の一箇の窓から

稻妻に似てこの空虚を射る

ああ 冷厳な「覚醒」だ

巨人よ

いまこそ、莞爾として

「窪地の窓」の天幕を引かう。

木は歩いてゐる

風の中を木は歩いてゐる

一歩一歩

目にも止まらぬ速さで、通過する

それは、勇ましい小旗の行列だ

天地に轟く歡呼だ

慄悍な輕騎兵の一隊だ

先達よ 喇叭を吹け

未明の往來を歩いてゐる

烈しい風の中を走つてゐる

ああ 街の木は

悲壯な行者だ「追放の使徒」だ

往け、走つて往け

遠く連る山脈の神々しい冠線を突破して

血振ひして昇る太陽と共に

大寒の空に喊聲を揚げよ

男性のときの聲を揚げよ

寂寞の往來から

疾風に馭して荒々しく門出する

この大歡喜よ

ああ 街の木は「朝の神」だ。

萩

露がこぼれる

さざりの

宵の

娘らの

なみだか 文字か

萩 萩 萩

ありなしの

風に

こぼれる

ひえびえと

秋が溶れる。

青
芒

あるかなきかの

風の影か

月夜の兵卒

青い槍の穂が 光る

揺れる

きらめく 鳴る

ひともあるかぬ

野原につゞけ

丘に駆けろ

青芒

今宵は思のまゝ

さあ 秋の散兵だ。

眠らぬ街

それともとても分らない

狂つた床屋さんの恫懣

それがどこまでも曳かれる街面

雀共のやうに賑やかな夕が……出掛けた

鼠鼠鼠

わが船はこゝに乗りあげて了つた

つめたい登音ばかり

空へ空へ馳け昇る

滅入るやうな雑踏から

やうやく掴んできたたつた一つの意志ががちやり

私はそつとかくしのびすとるに觸つてみた

鐵のあばら骨がけらけらと笑ふまでには

鳥渡まだ早い……天井、落着かぬ地上

窓は一つ一つ瞑る

女は魚さかなの如に泳ぎまわる

腰抜け乞食もぼくり立ちます

常明燈の池のほとりで

良心はこつくり眠りかける

塔がよろよろ

——門番の爺奴ぢい 霧の中で腐つてしまへ

骨ッばい腰掛が背を丸々さしてきたのに

白鷺めいて立つては居れぬ、ほう驚いた

ばしやりととたんに落ちてきた

この不東な桐の葉奴!

塔

「これでも喰へ！ と叫びながらあれは

わしの脚もとへ空弾を放りつけた、莫迦な……」

と突然塔は呟いた

天鷲絨色の夜に

凱歌を擧げて行く奇蹟みたいな男を見送つて

私は木の葉の如に耳を聳てた

「……軽蔑……いや、憐れな奴……」

星はびらびら

「わしは」と尙も塔は續ける「運命の對數表をよう暗んじてる……

自暴の發作、激情の酔つばらひ、若者よ

有に惑はされて無を知らない

無に囚はれて有を掴んでない

可哀想な男だ

酔つばらへ酔つばらへ

哭け哭け哭け

うんとうんと喚くがいい

ただそれ丈のこと……

だが、わしは知つてゐる

やがてへたばつて死にさうになつたら

五分でも一分でもたつた一秒でも置いてくれ！ と

激越、悲痛、あらゆるはんふるな心理で、表現で

またあれはやつて来るだらう

砕けた石になりたくない爲に

光つて在りたい爲に、そうだ、考へるために……」

ほつと塔は斯う結んだ

天はさむさむと仄明りを流し始めた

一つのはつばは隣りのはつばをべしやりと叩いた

私はくるりとこの場面から踵を返へした

その後、幾夜々々——

あれと呼ばれたあの男がやつて来たか否か

或は見知らぬどこかの往來で

脳天をぶち割つて冷たくなつたか否か

私は、私は知らない

けれ共、塔は見る夜見る朝何かの徴しるしの如に毅然として立つてゐる。

眠

街角から 瓦斯燈が女鼠々々と歩きました
 あたゝかい夢から叩き落された 鳥類の如に
 私は驚いて橋を渡つた 飛び越えた
 霧笛が いつ迄も鳴つてゐます

どこだらう！ こゝは

何時だらう！ いまは

見も知らぬ 見も果てぬ路に立つてゐます

心中に燃えるきやんどんは かなしい魚の一つ目です
 人の世のことは なんにも思ひとない
 つべたい 青い天井に
 きりきりと突立つて死んでゐる あの煙突の如に
 私は カツと月を吐きました。

無

零時を指してことり意志が止つた

物そのものゝあらはな自由よ

因縁づくな時と處の

肖像は夢幻と壁を離れる

満月の如に轉んでゐる思出の

彼方で

怪鴉よたがが啼いてゐる

霧は しきりに窓を越めてゐた。

鷺

たそがれの沼の邊に

白鷺が一羽

しもつきの雲の片かたみたいに立つてゐる

乃空は寒々と連峯を切つて

その時

風は落人のやうに枯蘆に寄り添つた

なんといふ悲しげな沼だらう

渡り鴉の飛び過ぎた後

魚たちの小さな驚きもどこかへいつた
たそがれの沼の邊に
孤獨な白鷺が
遠く雲の影みたいにイつてゐる。

打坐篇

打坐 I

雨よ 降れ降れ

屋根裏の部屋に悵鬱をけむせ

だがね、よし冷たい石とならうと

私は一大事を考へてみる

世界の事を、關係の物を、そして自分……

雨よ 窓をかくせ！

打坐 II

わしは坐る

この世の底へ落ちこもうとも

譬へば、深淵の炎となつて

わしは

金剛この坐を動かまい

かなしい人の世の密林よ

ああ 如何に明るくそれが騒がばとて

冷厳無二な石の上に

性根を据えて、わしは坐る。

打坐 III

何をか思はざる

何をか想ふべき

しろき夜のつめたき睡りよ

我、まなことなり

我、みみとなり、こころとなり

ああ いにしえの何の夜明けぞ

ひとり^ひ在らばあれや

山の、谿の、野の、街の

うるはしき霧の館か……

嵐・嵐・嵐

鳥羽玉の高座の上
元として眠らん哉。

打坐 IV

月は

尼ほどな感じもなくなり

夜の空に尙高い

あの小さな一つの星は

そして小女の不思議も持つてゐません

血を、血を捧げたほどに——私の情熱はるしゆくしてゐたが
私は

落ちる前の木の葉の如に

どこか—私の靈魂みたいなところに粘着しながら
なんとも説明することの能きない
まづいまづい
苦味のくちびる、噛みました。

打坐 V

風が叫んでゐる

暗い海の戦慄……

起きろ起きろ

暴民が首都を取り巻いた

反逆の船が漂々と流れてゐる

青一面の寒空に

怖るべき哉 呪文の老婆は見る見る火の子を吹き揚げて
ふたゝび猫のやうに爐邊に眠つた

魔術の合言葉が頻りに窓の戸を叩いてゐる
ことり、と沈黙……

水晶の小箱の中に

All mighty の鍵の如にはいつてゐた。

打坐 VI

つめたい風が

胸にびたり擬せられたけれど

盲人の如に青空を戀して

千年 遷流の月を宿した

深い谷の たなごころ 掌に

一本の水仙が開いてゐた

霧が

沈める貌をそつと舉げて

かなしい別れをつくるために

愛人の如に身を震はしたけれど

ああ 私の心の底には

無爲の花が微笑してゐた

虎

たそがれが深い山を搬んで迫つた

竹林は静かな笛を鳴らしてゐた

虎！ 歸館の虎はその中に悄然とイフ

彼は失へる一鳥の行術を考へた

彼は脚下の獲物の哀れな残骸を睜めた

孤傲、寂寥、悲哀……

つめたい月の夜の戦慄が

山と山、谿と谿、一面の草と木から

蒼白い霧のやうに生じた

濕つばい思惑の中を彼は歩く

嶺に、絶頂に向つて

否否、夜毎星を流す川へ赴くために

清らかな流れの姿が空虚な胸に映じてきた

そして只一度の號吼が薄闇を破つて擧げられた

虎！ 撃竹のその刹那の聲よ！

竹林の悔恨と畏怖の中に

彼は

ばつちと永遠の眼を瞎いた。

斷魂賦

——五月に與へる——

家々の屋根は

雨あがりの緑林の間にポコポコ泛んで

まるで生なまな茸のやうな感じ

場末の町にも五月が來たよ

ミヤコよ、どうしてゐる？

おれがお前に始めて逢つたのは

去年の五月

この新緑の五月であつたなア！

早いものだ……丁度あれからもう一年になる……

まる一年経つて、斯うしてまた思出の五月がめぐつて來たが

ミヤコよ おれは晴れてお前に會へずに居るよ

何故ツて？……おれはやくざで、矢ッ張りまだ食くうや喰くはずに居るからさ……

このおれを笑つておくれでない

おれにだつて舟乗りの馬賊の——いや、お上品な言葉をかりるならあの立派な騎士の——
セイカンな意氣は充分にあるつもり

だが然し、そんなモノは今クソの役にも立ちはしない

朝から晩までおれはガツガツして
 精心——このスキツ腹にそんなモノがあるとしたら
 多分おれが眠つてゐる時だけおれのところに宿つてゐるのだらう
 このおれは、いま餓鬼か亡者か

たつた一年ではあるがポーポーと十年も二十年もたつてしまつたやうに思へてならない
 ミヤコよ おれは今お前にあひたい
 因果な五月だ……ミヤコよ ミヤコよ おれは今お前にあひたい
 ああ たゞお前にあひさえしたら……

思ひ出して呉れ 去年の五月

おれが生命いのちを賭してお前に逢ひに行つたあの夜のことを

せめてはも一度想ひ起しておくれ
 この身窄らしいおれから匿れたその場所で

五月よ 五月よ 五月よ

とうとうまたおれの心内に蘇生する女 五月よ

鬱熱の青葉木の下の空しいベンチは

だか如何に情ない夜を持つだらう 吁！

かなしき情交

—松坂秀一に贈る—

たばこものまない

ひとり者は

夜になれば窪地の街へ

徨ひ行く

花屋の前を素通りして

果物店くだものやの前を素通りしてあくがれた酒場はちの前を素通りして

ああ 香氣を尋ねる鬼のやうに

美しい 明るい まぶしい

高貴な、甘味な、俗悪な

路から路を

渡り歩く

あひぼうもない

ひとり者は

夜になれば街の溜池へ

忍んで往く

湯の匂ひが泌みてくる

どぶどぶに沿ふて路をつたつて

明るく、暗く
 哀れに、うれしく
 人情の皿小鉢をのぞきまわる
 ああ 一匹の野犬のやうに
 悪嗅の溜池へ
 うかゞひ寄る。

白 旗

——渡邊茂に贈る——

人が三角臺と呼んでゐる
 山の頂點に二人は立つ
 君と僕
 僕は突風の如にやつて來た
 君は巨木の如に待つて居た
 「一色の旗を出さう！」と唸るやうに巨木は言つた
 「うん！ 一流のね……」と轉ぶやうに突風は叫んだ

末明の霧をくゞつて

初秋の端緒に觸れて

そして簡粗な朝餐に快く坐る

僕と君

ああ 山巔に

孤獨な友情を喜ぶ如に

一流の白旗は翻る。

蒼 天 歌

——中西悟堂に贈る——

蘆と蘆と交るあたり

風を洩いで

さうくと私は歩いた

たまげた小さな鳥の行方を

追駈け追駈け

こゝろを忘れ

吹き晒しの沼地を徒涉しながら

私は青空を讚美した

かなし かなし かなし

どこまで行つても蘆と蘆との

渺茫の野に舟を漕げば

地平遙かにひびき鳴る

若き日の空想よ 歎慕よ

ああ 落日の空のやうに胸をひろげて

私は

孤獨な夕餉も忘れた。

梟の歌

—むめいのひとにおくる—

I

よひどれ月奴が

どこまで舟を漕ぐのだらう

浮世 おぼろな春の夜に

啼くな なぐさ 梟

俺はさみしい

西に向ふぼろんじだよ。

II

舟よ 来い 来い

この岸邊でとまつておくれ

ああ 花が散る花が散る

吹くな 北風

俺はさみしい

人の子の影法師だよ。

III

西に流れる

葉笛よ 鳴れ 鳴れ

ああ 美しい歌でもこめて

泣くな 川水

俺はさみしい

はなびらだよ はなびらだよ。